

在日コリアンによる民族・民衆文化運動の歴史的背景：生野民族文化祭と三・一文化祭に着目して

金子, 真紀
九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻：博士課程

<https://doi.org/10.15017/7386771>

出版情報：国際教育文化研究. 15, pp.229-238, 2015-10-28. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



在日コリアンによる民族・民衆文化運動の歴史的背景

－生野民族文化祭と三・一文化祭に着目して－

金子 真紀

はじめに

在日コリアン 2・3 世たちが社会進出を始めた 70～80 年代は、在日コリアンの人々が抱える問題や、日本との歴史的な関わりが明示され、共生への歩みが民衆レベルでは少しずつ進められた。しかし、日本社会との溝は深く、彼らによる社会運動や人権運動も活発に行われており、指紋押捺拒否運動は記憶に新しい。そんな中、在日コリアンの人々の中から新たな運動として、「祭り」を活動とした民族・民衆文化運動が現れた。民族・民衆文化運動はこれまでの在日コリアン社会、また日本社会に大きな影響を与えた。祭りでは、プンムル(農楽)や民族楽器演奏、タルチュム(仮面劇)、舞踊など文化的、身体的な活動(以下、文化的実践)が行われた。これまでの日本社会において、在日コリアンの人々が積極的に自分たちのルーツである、朝鮮半島の文化的実践を行うことはなく、学ぶ場さえもほとんどなかった。そんな中彼らはなぜ多くの祭りを開催し、文化的実践をこんなにも積極的に行うようになったのであろうか。

このような問題意識のもと、民族・民衆文化運動がはじまるまでの在日コリアンたちの前史を整理し、歴史的な文脈から彼らがなぜ祭りを行うようになったのか、また行えたのか、その要因を明らかにしていく。その際、2 つの祭りを取りあげ、具体的に歴史的流れがどのように現在に繋がっているのかもとらえていく。取りあげる祭りは、民族・民衆文化運動のはじまりと言われている「生野民族文化祭」、そして福岡県で唯一行われている「三・一文化祭」である。

現在、筆者は三・一文化祭へフィールドワーク調査を行っている。三・一文化祭を取り上げる理由としては、これまで在日コリアンによる文化的実践、民族まつりは多く研究されているが、対象にされたもののほとんどは関西、関東地域で行われているものであり、「三・一文化祭」についてはほとんど取り上げられてこなかったことがあげられる。地方での祭りではあるが、地理的に朝鮮半島に一番近く、多くの在日コリアンが居住している福岡において開催されており、在日コリアンの文化的実践をみていくうえで重要な実践の一つであると考えている。

以下、民族・民衆文化運動がなぜ行われたかという要因を、①日本への定住、②運動組織の変化、③韓国民衆文化運動の影響の 3 つの視点から整理していき、本稿の目的を明らかにしていく。そして、生野民族文化祭が開催された流れと祭りの概要を確認し、現在筆者がフィールドワークを行っている三・一文化祭に触れていく。

1. 在日コリアンたちの前史

1-1. 戦後における日本への定住

朝鮮半島の人々が日本へと移住した時期は3つの段階に分けることができる。①古代：紀元前2世紀ごろから紀元後7世紀まで(高句麗、百濟、新羅時代)、②中世：1592年から1598年(豊臣秀吉による朝鮮侵略時)、③近代：明治時代以降(帝国主義国家時代)の3段階である。「在日コリアン」と呼ばれる人びとは近代から日本に定住した人々のことを指す(金 2003:17-18)。近代でも特に1910年の韓国併合後、日本の植民地支配の中、農地収奪などで没落した農民など、困窮状態に陥った多くの朝鮮の人々が日本に渡った。それ以前の1890年代頃から、留学生など、朝鮮の人々が渡航しているが、特に渡航者が増加したのが1910年代以降である。この時期、働き場があった、大阪、兵庫、東京、京都、山口、福岡には多くの朝鮮人が集住するようになる。大阪、東京など関東・関西地方は工業地帯であったため、山口、福岡は炭鉱地帯があったため、労働力として朝鮮半島の人々が多く雇用された。また、大阪などには製糸・紡績工場もあり女性も多く雇用されていた。日本人からの民族差別はひどく、労働力として搾取するだけ搾取するという劣悪な環境で、虐使され死亡する者もいた。しかし、渡航する朝鮮半島の人々は後を絶たなかった。それほど朝鮮半島が困窮、混乱していたのである(金 1996、金 2003)。

1920年代～1930年代後半にかけては、渡来した朝鮮の人々によって多くの団体、労働組合や女性運動組織等が組織され、朝鮮の人々が多く居住していた大阪、東京、福岡などいくつも拠点が置かれた。このような団体が組織されたのには、1929年の世界大恐慌などの、日本経済への打撃が彼らの労働環境に直撃したことが原因であった。労働力として朝鮮の人々が入ってきた当初から、劣悪な労働環境であったものの、それに追い打ちがかり、失業者が増大し、団体の活動が活発となった。しかし、日本の労働組合に吸収されたため、彼らの労働環境が改善される兆しはなかった(金 2004)。

また、同時期の1930年代に、在日コリアン社会では演劇、舞踊、文学などの文化面での活動が活発に行われていた。猪飼野では朝鮮から芸人を呼んで公演を行ったり、在日コリアンの中から大衆芸人が誕生した。しかし日本政府の厳しい監視がつくなど、在日コリアンの民族的な文化芸術は抑圧によって挫折へと追い込まれた。そしてその頃、在日コリアン対策として、徹底的な同化政策を打ち出されている。保護団体の強化や宗教が手段として使用された。そしてもう一つの手段として学校教育による同化政策が徹底されはじめる。朝鮮系の学校は閉校され、公立の学校への通学が推し進められた。それによって朝鮮語が奪われ、民族的劣等感を植え付ける歴史教育が行われた(金 2004)。

1939年の戦時体制化では、多数の朝鮮半島の人々が日本に「強制連行」されたという歴史は周知の事実である。そんな中、日本は「内鮮融和」などをスローガンに、「日本語常用」や「創氏改名」を強要した。この「創氏改名」は、この後の在日コリアンの歴史において「通名」として残り、在日コリアン2・3世のアイデンティティ形成において葛藤の一つとなる。現在においても通名を使用している人や通名と本名を使い分けている人が多い。

1940年代はじめから敗戦前までは反日意識も増すばかりで、労働からの逃亡、投獄、紛争と

いった抵抗が各地で行われていた。そして、1945 年日本の敗戦後、朝鮮人は植民地支配から解放された。日本に在住していた朝鮮の人々も、多くが祖国へと帰って行った。当時は 200 万人以上の朝鮮の人々が居住していたと言われているが、3 分の 2 以上の人々が帰国し、約 60 万人もの人々が日本に残ることになった。その引き上げの際は、大阪や福岡など港がある場所に多くの朝鮮の人々が殺到した。そこでは、軍事関係者が優先されるなど、引き上げ体制が不十分であったため、一般居住者の人々が足止めを受けるなど、引き上げはスムーズには行われなかった。せっかく帰国できても、戦後の朝鮮半島の混乱による生活苦で、日本に舞い戻ってくる人びともおり、残留した人々の多くも帰国を希望していたが、朝鮮における生活難を聞いたり、私財持ちだし規制が強まったため、帰国を躊躇う人々が増えていった。何十年という間日本で生活していたため、生活基盤がすでにできており、逆に祖国での経済基盤がない状態であった。

1945 年の 12 月には参政権が剥奪され、1952 年には日本国籍も剥奪された。そして、在日コリアンは外国人となり、社会保障も受けられず、指紋の押捺を強要されることとなった。1948 年には阪神教育闘争ⁱⁱが起き、民族教育の場を求める運動が盛んになった。1958 年には帰国運動が展開され、在日コリアンを北朝鮮へ帰国させる動きがあった。しかし、在日コリアンのほとんどが南部出身であったことなどもあり、希望者が徐々に減少し、この運動は 83 年に終結した。この運動は「棄民政策」として韓国政府や在日コリアンから強く批判されることとなる。1965 年には「日韓法的地位協定」により「協定永住」が認められた。

以上のように、戦前からの日本の植民地化政策、それによる朝鮮半島の混乱などを経て、多くの朝鮮半島の人々が日本への定住を余儀なくされた。祭りが開催するにあたって一番必要であったのが、祭りを盛り上げる人の数である。在日コリアンの定住の歴史を見ていくと、大阪と福岡は特に多く居住している地域であることが分かる。

1-2. 在日コリアン内の対立

在日コリアンの人々は戦後、自分たちの権利を獲得するため様々な団体を結成した。現在、在日コリアン社会において「在日本大韓民国民団（民団・旧在日本韓国居留民団）」と「在日本朝鮮人総連合会（総連）」という形で、朝鮮半島の南北対立が持ち込まれていることは良く知られている。生野区においても、どちらの所属かをはっきりと明示しておかなければならなかった。この対立は在日コリアン社会内の統一を長い間妨げてきた。現在においてもこの団体の影響力は強く、二つに分かれている状況ではあるが、積極的に 2 つの団体が行う政治的な活動に関与する在日コリアンは少なく、民団、総連離れが進んでいる。

日本の敗戦直後 1945 年 10 月に結成されたのが、総連のはしりである、在日本朝鮮人連盟（朝連）である。朝連は帰還事業や、投獄された人々の解放、未払い賃金の請求など、日本政府への強い働きかけを行い、在日コリアンの権利と自由の獲得に貢献してきた。そのため、多くの在日コリアンの人々からの支持を受けていた。しかし、右翼派で、反共思想の強かった青年たちによって朝鮮建国促進青年同盟（建青）が 1945 年 11 月に結成された。この二つの組織は度々対立した。その後、親日派を戦犯処分されないように働きかける新組織として、翌年 1 月に新朝鮮建設同盟（建同）が結成される。建青と建同は 10 月には在日本朝鮮慰留民団（後の民団）

を組織し、ここに在日コリアン社会における二大組織が誕生した。

1948年8月に大韓民国（以下、韓国）が樹立し、9月には朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）が樹立した。民団、朝連は各々の国樹立に歓喜したが、1949年に共産側の朝連がGHQにより解散させられた。前年、民団は在日本大韓民国居留民団に改称している。また1947年の外国人登録令が発せられた際は、国籍は「朝鮮」とされていたが、大韓民国樹立後は「韓国」となり、朝鮮は地域をさす呼称とされた。朝鮮半島に二つの国が誕生し、対立を深める中、在日コリアン社会でも同様の対立が深まるばかりであった。そして1950年ついに朝鮮戦争が勃発する。民団からは義勇兵が送られるなどし、祖国と在日コリアン社会の南北分断は決定的なものとなった。

朝連が解散し、その後その傘下にあった組織が集まり、在日本朝鮮統一民主戦線（民戦）が1951年に発足した。朝鮮戦争が勃発し、北朝鮮側を支援するため発足の必要性が高まったためであった。朝鮮戦争の間、日本はサンフランシスコ平和条約を発行し、在日コリアンの日本国籍を剥奪し、外国人と位置付け、国籍も韓国政府との会談において選択権を与えないよう、働きかけることに合意していた。そのため在日コリアンは国籍が日本でもなく朝鮮でもなくなってしまったのである。朝鮮戦争が1953年に休戦した後は、1955年から外国人となった在日コリアンに指紋押捺を義務付けることになった。その際、2つの組織も猛反発したが、実施されるにいたった。また同年、民戦の運動方針への反発があり、民戦は解散され、在日本朝鮮人総連合会（総連）が結成された。

60年代に入り民団の中から、新たな運動体として在日コリアンの青年たちによる青年学生団体が組織された。「在日韓国青年同盟（韓青同）」と「在日韓国学生同盟（韓学同）」が出てきたり、日本人市民と在日コリアンが共闘する「民族差別と闘う全国連絡協議会（民闘団）」など、新しい運動の流れが出てきた。特に青年たちは政治的な運動よりも、文化的な運動を基盤としていた。青年学生団体は様々な民族文化体験プログラムを主催しており、そこで在日コリアン2・3世は民族文化に触れる機会があった。また韓青同や韓学同のOB・OGなどが在日コリアンの若い世代の将来のロールモデルようになっていた。また小・中学校での民族学級の講師なども青年たちがボランティアとして行っており、それまで内容が希薄だった民族学級の取り組みも、青年ボランティアの活動により、地域、学校を越えた取り組みへと発展し、現在の民族学級の基礎を確立させていった。民族・民衆文化運動で行われた祭りにも、この青年学生団体に所属する若者が多く参加し中心を担っていた。玄（2014）は、そのネットワークが民族文化祭成功の鍵を握っていたのではないかと指摘している。青年たちの中から、在日コリアンたちも組織ではなく個人として、この日本社会で生きていくとはどういうことか、生きていくためにはどうすべきかという、定住志向の動きが出てきたのである。このような多様で重層的な動きと、これまでの在日コリアン内の対立の歴史によって積み重なった彼らの葛藤、そして組織としてではなく、個人としてどう在日コリアンとして生きていくかという、新しい世代の動きが、民族性を解放させる民族・民衆文化運動へと向かわせたのである。

2. 韓国の民衆文化運動・民族文化の影響

朝鮮半島での戦後の動向は、上でみてきたように在日コリアン社会に多大な影響を与えている。その中でも、生野民族文化祭に直接的に影響を与えたものが、韓国の軍事政権下において、学生を中心に行われた民衆文化運動である。

70年代から80年代にかけて韓国では強権政権への抵抗と、民主化を求めて、民衆と政府との対立が激化していた。そこでは暴力的なデモも頻発しており、死者も多数出ている。特に1980年5月18日から10日間に及んだ「光州事件ⁱⁱⁱ」は民衆に深い傷と、暗い記憶を残している。この事件は在日コリアン内にも衝撃を与え、本国の民衆に思いをはせる人々が多くいた。この事件以前の70年代頃から、韓国全土にあるほとんどの大学で「タルチュム（仮面劇）研究会」が発足され、「タルチュム」ルネッサンス^{iv}が広がっていた。学生たちは民主化運動、労働運動の展開と呼応し、現実を風刺したタルチュムを大学の学生集会などで上演した。この運動は学生から、徐々に労働者たちへと波及していく。そして80年代から「マダン劇（野外演劇）」という言葉が一般的に使われるようになり、「タルチュム」ルネッサンスは「マダン劇」と結合していった（梁 1981）。70年代に起こった「マダン劇」運動は80年代に入り、やはり学生を中心に活発化していく。そこでは「西欧化された文化に反対し、伝統の意味を生かす文化の民衆志向性と共同体性を強調し、対抗文化を発展させ」（権 2006: 57）、マダン劇やタルチュムなどが行われた。これらは「運動参加者たちの運動家としてのアイデンティティのみならず、デモ文化を形成する上で大きな役割を果たした」（権 2006: 57）のである。

この民衆文化運動の最中、1981年に『仮面劇とマダン劇—韓国の民衆演劇—』（晶文社刊）が日本で出版された。そこには韓国の現状と、民衆文化運動における「マダン劇」の役割が記されている。これに感化された在日コリアンの人々によって、日本で「マダン劇の会」が発足した。1982年のマダン劇『アリラン峠』の公演を成功させた団体である。この団体は生野民族文化祭にも参加しており、「マダン劇の会」の中心人物である梁民基（ヤン ミンギ）氏は生野民族文化祭のマダン劇の指導も行っており、生野民族文化祭の人々と深い関わりを持っている。文化祭と同じく、80年代の在日コリアンたちの民族・民衆文化運動の大きなきっかけを与えた。梁氏はマダン劇の会発足には、『仮面劇とマダン劇』（晶文社刊）との出会い、が前提としてあった」（梁 1985: 45）、と述べている。また、『アリラン峠』のパンフレットには、「私たちがなぜマダン劇をやるのか。第一に、七〇年代韓国でおこり全国各地の民衆のあいだに広まった『マダン劇運動』を、同時代に生きる同じ民族の一員として、共有したいから」（同上: 45）という言葉が書かれており、韓国での運動の影響を受けていることを示している。「マダン劇の会」のほとんどの人は実際にマダン劇を観たことがなかった。ただ韓国で起こっている状況を知り、自分たちも韓国で生じている葛藤を共有し、そして自分たちの状況と重ね合わせたのである。

また80年代において、韓国から多くの演奏家や舞踊家が公演に訪れ、在日コリアン2・3世の若者の中でうずく民族的部分を刺激し、魅了した。戦後、朝鮮半島でも自分たちが失った民族性を回復させるため、民俗芸能、音楽や舞踊などを確立するのを急いでいた。その中でもサムルノリを確立し、生ける伝説として有名な金徳珠（キム ドクス）氏は特にプンムルなどの楽器演奏を行う若者の憧れの存在であった。このような自分のルーツへの渴望と、朝鮮半島の民俗芸能への関心から、何人もの在日コリアン2・3世が韓国に留学し、楽器演奏や舞踊などの

道を極めていったのである。そして、修行を経て帰国した在日コリアン 2・3 世は民族学級の講師や教室などを開き、また祭りの中心を担う存在として活躍した。

以上のことから、在日コリアンたちが祭りへと進んだ要因の一つに、韓国の民衆文化運動の影響と、韓国の演奏家たちの影響があったことが明らかとなった。

3. 在日コリアンによる文化的実践

3-1. 生野民族文化祭

生野民族文化祭は大阪市生野区で、1983 年から 2002 年まで、在日コリアン 2・3 世が中心となって行われた祭りである。生野区の中心に位置する「聖和社会館」という場所が拠点となっていた。ここでは「オモニハッキョ」という、在日コリアンのオモニ（お母さん）たちの識字教室やハヌル子ども会などが行われており、この地域に住む在日コリアンの人々の公民館的な施設となっている。また保育園が併設されており、そこには在日コリアンの子どもも多く通っている。この聖和社会館で当時館長をしていた金徳煥（キム トッカン）氏が、生野民族文化祭の発起人である。彼は当時「生野には 4 万人も同胞が住んでいて祭りひとつないのか。情けないな。」という 1 世の言葉から、在日コリアンの祭りを行うことを決意した。1982 年の夏頃から金氏は知り合いに声をかけはじめ、各々で自分のルーツ、民族性を求めて活動していた 2、3 世たちが徐々に集まっていった。そして、「ひとつになって育てよう 民族の文化を！ ころを！」というスローガンのもと、一年間の準備の末、1983 年 10 月 16 日大阪市立御幸森小学校で開催された。このスローガンには失われつつあった若者の民族的自覚を養うこと、民族の連帯を取り戻すという思いが込められている。生野民族文化祭には他にはない特徴がある。それは在日コリアンしか舞台に立てないということだ。日本人や帰化者は手伝いは出来ても、舞台には立てない。閉鎖的な印象を受けるが、自分たちの民族性を解放させるためには、それほど条件がなければ行えなかったのである。その後毎年 10 月頃に、会場は公立の小中学校を転々と周りながら開催された。宣伝を兼ねて、開催前日に生野区をブンムル隊が練り歩く。これが生野区の年中行事として 20 回続き、2002 年 10 月 27 日大阪市立勝山中学校での文化祭が最後となった。生野民族文化祭をきっかけに、全国さまざまな場所で、100 以上もの祭りが開催された。

生野区は日本の中でも在日コリアンの人々が多く居住している地域である^v。現在ではコリアンタウンとして観光地化されているが、生野区に居住する在日コリアンの人々もこれまで多くの差別と排除を受けてきた。生野区において祭りが開催できた要因には、やはり圧倒的な在日コリアンの人数があげられる。文化祭の実行委員を務めた人々も人数の多さが成功をもたらしたと考えている。また、生野民族文化祭に関わった若者の多くは民団から派生した青年学生団体に所属していた。「マダン劇の会」との接合や、韓国で舞踊や楽器を学んだ若者たちが生野民族文化祭に関わったことも開催を盛り上げる要因となった。生野民族文化祭は担ってきた役割を終え、2002 年でその歴史に幕を下ろしたが、そこに関わった人々は現在でも演奏活動を行ったり、プロとして活動したり、教育現場に入り次の世代の民族教育に力を注いだりと、それぞれの実践の場所を見つけている。

3-2. 三・一文化祭

三・一文化祭は、1990 年から福岡市東区で行われている祭りである。この文化祭を主導していたのが、パク・カンス、チェ・インシク、キム・エスンである。彼らはそれぞれ、韓国に留学し楽器を学んだり、地域で文化的な活動を積極的に行っていたりと、自らの民族に関わる活動を行っていた。1989 年に福岡市において、民族教育文化グループ「ウリマダン」を結成し、サムルノリなどの演奏を学校などで行っていた。これが三・一文化祭の母体となる。彼らは演奏活動を行う中で、大阪で行われた生野民族文化祭(1983~2002 年)やワンコリア・フェスティバル(1990 年~)の影響を受け、福岡でも在日コリアンによる祭りができないかと模索していた。そのとき、北九州市で 82、83、85 年に開催された「三・一文化祭」を知り、福岡で復活させようとその祭りを引き継ぐことになった。三・一文化祭は名前からも分かるように、1919 年に起きた三・一独立運動の精神を継承し、「在日コリアンとして日本人として歴史にどう向き合っていくのか、そしてこれからの社会をどう創っていくのか」を基本的なテーマとし、人と人のつながり、地域とのつながりを重視し、「在日」が自らを主張し、発表できる場づくり、日本人が”隣りの存在”に協力しあっているようなマダン(広場)づくりを目指している。

三・一文化祭も生野民族文化祭と同様、福岡という在日コリアンが多く居住している地域で行われた。集住地区も数か所あり、東区はその 1 つである。はじめの頃は宣伝活動を行う中で水をかけられたりと嫌がらせを受けることも多々あった。しかし第 1 回目の参加者は 500 人を越え(2 日間の総人数)、反響を呼んだ。現在では参加者は半分にまで落ちこんでいるが、テーマにあるように、三・一文化祭では日本人と在日コリアンの人びとが協力しあっているようなマダン(広場)づくりを実現している。三・一文化祭も徐々に世代交代に迫られ、いつまで続けられるか分からない状態であるが、どのような活動が行われていくか観察を続けていく。

おわりに

歴史的文脈から彼らがなぜ祭りを行うようになったのか、また行えたのか、その要因を明らかにしていくことが本稿の目的であった。まず、在日コリアンの人々の定住過程を見ていった。日本の植民地化政策によって職を失った多くの朝鮮半島の人々が、日本に働き場を求めて来日した。特に働き場があった大阪や福岡では多くのコリアンを雇用しており、多くがその地域に居住していた。解放後、引き上げの際にも福岡と大阪には人が殺到したが、戦後の混乱の中、政治的、経済的な問題によって朝鮮半島に帰国できず、日本に定住を余儀なくされた。生野民族文化祭や三・一文化祭が開催できたのは、在日コリアンの人々が多く居住している地域であったからである。

次に、在日コリアン内の民族の分断と 80 年代における運動組織の変化を整理した。現在でも民団と総連が在日コリアン社会を二つに分断している。しかし在日コリアンの若者たちはこの 2 つの団体の方針に抵抗し、対抗する勢力として新しい運動体の流れとネットワークを誕生させた。そのメンバーの多くが生野民族文化祭に関わっており、三・一文化祭にもこのメンバーに所属していた人が関わっていた。

そして最後に、韓国の軍事政権下に行われた、民衆文化運動の影響を述べた。韓国での学生たちの活動に共感し、共有したいと考える在日コリアンたちによって「マダン劇の会」が発足した。彼らは、韓国の学生たちが行った実践を共有することで、自分たちの民族性を解放し、日本社会からの疎外へ抵抗しようとしたのである。そしてその活動は、生野民族文化祭や他の祭りとは接合していった。また、韓国の演奏家などの影響と、それにより韓国へと留学する在日コリアン 2・3 世の若者たちの存在をあげた。以上のような歴史的な文脈の中で、生野民族文化祭、三・一文化祭をはじめとする在日コリアンによる祭りは開催されたのである。

民族・民衆文化運動の中で行われた祭りによって、現在では多くの民族芸能の教室が開かれ、民族学級も普及している。しかし、在日コリアンの人々に対する差別や排除は今も続いており、祭り開催にあたっては未だに妨害や嫌がらせをされないかという緊張が伴っている。三・一文化祭では在日コリアンの若者(中高生)も参加している。いつまで妨害への対策が必要なのか、これからの世代に差別や排除が残らないよう、政策的にも対策をしていく必要がある。

【参考文献】

飯田剛史

2002 『在日コリアンの宗教と祭り 民族と宗教の社会学』世界思想社

2014 「民族まつりの展開と課題」『民族まつりの創造と展開 上 論考編』、飯田剛史(編)、pp.3-40、JSPS 日本学術振興会科学科研費・基盤研究(C)

稲津秀樹

2006 「在日韓国・朝鮮人運動のカルチュラル・ターン—生野民族文化祭における〈民族〉と〈楽しさ〉—」第7回(2006年度)J.C.C.Newton 賞受賞作品、関西学院大学図書館

太田順一

1987 『女たちの猪飼野』晶文社

金徳煥

1985 「民族のマダン(広場)—生野民族文化祭—」『月刊社会教育』8,No.344 pp.29-34

1997 「講演録：大阪・生野からのメッセージ—生野民族文化祭がめざすもの—」

『クルパン—塾報 第21号 第52期(1996年4月—10月)』、クルパン編集委(編)pp2-23、現代語学塾

金賛汀

2004 『在日、激動の百年』朝日新聞社

金泰泳

1999 『アイデンティティ・ポリティクスを超えて—在日朝鮮人のエスニシティ』世界思想社

金英達

2003 『金英達著作集Ⅲ 在日朝鮮人の歴史』明石書店

権仁淑

2006 『韓国の軍事文化とジェンダー』御茶の水書房

玄善允

2014 「在日の精神史から見た生野民族文化祭の前史ー在日の二世以降世代の諸運動と『民族まつり』『民族まつりの創造と展開 上 論考編』、飯田剛史(編)、pp.41-62、JSPS 日本学術振興会科学科研費・基盤研究(C)

福岡安則

1993 『在日韓国・朝鮮人 若い世代のアイデンティティ』中公新書

梁民基

1985 「猪飼野のマダン劇運動」『新日本文学』1985年1月号 No.448 p43-49

梁民基・久保覚 編訳者

1981 『仮面劇とマダン劇ー韓国の民衆演劇ー』晶文社

i 日本政府は帰国する際に、通貨 100 円、荷物 250 ポンド以上の私財持ち出しを禁止した(『在日コリアンの歴史』より)。

ii 1948 年 4 月 14 日から 26 日まで大阪府と兵庫県で起こった大規模デモである。日本政府による朝鮮学校弾圧に対して、在日コリアンと日本共産党員の日本人などが集結した。

iii 朴政権崩壊後、韓国南西部にある光州で 1980 年 5 月 18 日から 27 日の 10 日間くり広げられた抗争。その後、強権政権である全斗煥政権が誕生。民間犠牲者 189 名(戒厳司令部発表より)にもなった。

iv 「タルチュム」とは民衆が韓国の伝統的な仮面をつけ、貴族や政治などを風刺した仮面劇である。1971 年以降、韓国の学生たちによって行われた民衆化のための文化運動、創造運動に「タルチュム」を用い展開したものを、「タルチュム・ルネッサンス」と表現する。「タルチュム」の形骸的で表面的に復活させるのではなく、民衆文化という、民衆のための文化という普遍的な意味に根ざしたものとして取り入れた。

v 現在の在日コリアンの人口は約 52 万人(2013 年 12 月 法務省)となっている。特に大阪府に多く、約 11 万 8 千人(2013 年 12 月 法務省)が居住しており、東京都よりも多い数値となっている。その中でも生野区は「外国人登録者数総数上位 100 自治体 (2013 年 12 月 法務省)」で新宿に次ぐ 2 位となっている。新宿区はニューカマーと言われる人々が多いが、生野区はオールドカマーが多く、済州島にルーツを持つ人々が大多数を占めている。

**Historical Background of Zainichi Korean's Ethnic and
Cultural Movement of a People:
Focusing on the Ikuno Cultural Festival and 3.1 Cultural Festival**

Maki KANEKO

Abstract

In this study, I will introduce historical backgrounds why people of Zainichi Korean hold a festival. First, I will introduce the settlement process of Zainichi Korean. Second, I will confirm how the movement organization changed in Zainichi Korean society. Third, I will introduce Cultural movement of a people in 70's have an influence on Zainichi Korean and the players' Korean have an influence on Zainichi Korean. Finally, I will show the outline of Ikuno cultural festival and 3.1 cultural festival of Zainichi Korean from these reasons.